賊初何連歌

伊勢の荻や

末葉の有夜寒

墻根の山ゝ

ちるは出の子

山ちの嵐乃

寒し秋深き

秋深き
隣は何を
とりのこの
月かな

故郷の夢や
覚ぬ
別れん

行春や
鳥啼
魚の目
は涙

霞みけり
やすらふ
限りも
知ぬ
花に元
来
言葉
なき
草木の
心
いづれ
哀れ
知

いづ川の
春とおぼ
ゆるまで
あれにも
河ぞいと
ものうき
さの春
我庵ハ秋の花
山ちかくて
雲ハ
月の
世や秋
ハ
ハ
ハ

さまね安城
わひ人は神
住もる紀世は折
おりと三年て
思ひあは之
瀬とうる何
のりの阿まと替らは
ゆふひふつすま
さうろれ外乃
慈ようわ邊
櫻花手折よか
先に散りえて

故に我れ
先に為
る者たり
後に為
る者たり
四海之
内皆兄
弟なり
君子
何か患
へん
人の
生るや
直し
罔の
生るや
幸
して
免る
る

果ねて興を
わすれさるまゝ
芭蕉のうへ
ふるさと丸橋
新樂子三月五日

疎於俗間一生之元
須文一書之年
天保二乙卯十月六夜

変ぜざる時は
須臾も書き
難し

天保二乙卯十月下六夜

有教

建部伝内遺文之写

高田先生筆

伊地知文庫
文庫20
89